

『就実教育実践研究』第11巻 抜刷
就実教育実践研究センター 2018年3月31日 発行

幼児期の表現教育

The expression education in early childhood

秋 山 真 理 子

幼児期の表現教育

秋山真理子 (幼児教育学科)

The expression education in early childhood

Mariko AKIYAMA (Department of Preschool Education)

抄録

本稿は、2016年に引き続き2017年に、表現活動を特色とするゆかり文化幼稚園を訪問し、文化祭と園庭発表会を見学した報告をもとに、幼児期の表現教育について、よりよい表現教育とはどのようなものかを考察したものである。当園の表現教育は、いくつかの大切なポイントがあり、表現の芽生えから始まる子どもの表現活動を、成長に合わせ段階を踏んで指導することによって、自然に無理なく音楽・身体・造形の融合によるオペレッタを演じることができるようになっていた。

キーワード：表現教育、ゆかり文化幼稚園、弘田龍太郎、オペレッタ、教育方法論

I はじめに

大正期の「赤い鳥」の童謡運動の担い手の一人である作曲家弘田龍太郎(1892-1952)が、晩年の1947年に娘夫婦の藤田復生、妙子とともに創設したゆかり文化幼稚園は、現在も丹下健三氏の設計によるユニークな園舎と表現教育を特色とする園として有名な存在である。

筆者は、2016年5月に、東京都世田谷区のゆかり文化幼稚園を初めて訪問し、通常の園生活での生き生きと表現活動をする子どもたちの姿に感動し、引き続き9月にスポーツショー、11月に造形展を見学し、当園の表現教育について『就実教育実践研究』^{注1)}に「幼児期における表現教育—ゆかり文化幼稚園を訪問して」として報告した。

2017年2月に1年間の表現教育の集大成としての文化祭が、2日間にわたり行われた。前年のスポーツショーと造形展を見学していた筆者は、今回は、舞台装置を含め全体にどのようなものになるのか興味を持って見学した。実際には舞台装置も大変シンプルで、日常の園生活での遊びと自然に無理なくつながったものであった。

引き続き新年度の2017年5月には、新たな3歳児が入園して初めてのこどもの日のパーティーと呼ばれる園庭発表会を見学した。こうして1年間にわたり当幼稚園の表現教育を見学することにより、幼児期の表現教育についての多くの大切な示唆を与えられたと感じた。以下に、訪問内容を記し、幼児期の表現教育について、よりよい表現教育とはどのようなものかを考えてみたい。

Ⅱ 「ゆかり文化祭」を見学して

2017年2月に1年間の表現教育の集大成としての文化祭が、園内のホールのステージで午前中の2時間ずつ2日間にわたって行われた。斉唱と合唱、リズム合奏、自由表現、舞踊劇、オペレッタの演目が発表された。1年間の園の表現教育がどのように実を結ぶのか大変興味深く見学した。

1. 歌唱

弘田龍太郎、湯山昭、中田喜直、服部公一等の童謡作曲家の作品や、外国の歌やわらべ歌が歌われた。子どもの年齢に合わせ、子どもの大好きな動物の出てくる歌詞や美しいメロディー、弾むようなリズムなどを含む子どもの心をうきうきさせるような歌が選ばれていた。弘田龍太郎の歌やわらべ歌を歌うことは、昔からある日本独特の音階になじむという意味でも大切であると思われた。

1) 年少児

年少児にとって初めての発表会であり、多くの保護者・観客の前で歌うという体験そのものを大切にしていた。保育者は舞台の下で床に座り、舞台上の子どもたちが歌いやすい強弱やリズムなどの指示を身ぶり手ぶりで出していた。あくまでも主役は子どもであり、発表を見る観客との視線を遮らないようにという配慮でもあろう。発表会が近づくにつれて何となく元気のない子どもの様子から、練習をしてきた歌に飽きたのだと理解した保育者が、子どもに気持ちを聞き、本番直前に今歌いたい《かえるのうた》^{注2)}に急遽変更したという年少児らしいエピソードも披露された。臨機応変の大切さを物語るものである。

2) 年中児

今年度の年中児は95名と多いが、子どもたちみんなの良くそろった生き生きとのびやかな歌声にまず驚かされた。昨年訪問時に目にしたように、日々徒歩で登園し、起伏のある広い園内を走り回り全身運動を行っている結果、子どもたちの肺活量は多くなり、歌うのに必要な腹筋や背筋も自然に鍛えられていると推察される。全身で歌いリズムも音程も声自体も年少児からの1年間の成長の跡が感じられた。《ダチョウにのって》^{注3)}という歌では保育室にダチョウの絵を貼ったところ、子どもたちが背比べをしてダチョウに興味を持ち大きさを実感したという。そのような歌へのアプローチの大切さも紹介された。

3) 年長児

斉唱だけでなく、わらべうたでは掛け合いの交互唱が行われていた。これが合唱への第一歩であろう。また《きんもくせい》^{注4)}では、高音の一部に頭声発声を用いていた。園では、年中児の終わり頃から頭声発声の指導を少しずつ始めていて、この体験は子どもにとって「いつもと違うところに声が響く」という感覚で新鮮だったのであろう。とても柔らかに美しく丁寧に声を出していた。頭声発声の体験によって、怒鳴り声で歌うこともなく音域も広がり、歌える曲も増え表現もぐっと豊かになってくる。《わが名はカウボーイ》^{注5)}

という外国曲では、サビのメロディーが交互唱から自然に二重唱に変化するようにつくられていて、ハーモニーを作り上げる楽しさを体験できていると思われた。

2. リズム合奏

合奏の発表は年長児が行った。メロディー楽器は保育者が受け持つという点が他の園とは異なる点であろう。子どもたちの優れた聴く力を未熟なメロディー楽器の演奏で混乱させてはいけない、メロディー楽器を子どもが演奏することによって子ども同士で優劣がつくことを避ける、メロディーをしっかり聴きながらリズム打ちをすることで聴く力やリズム感を育てる、という確固たる考えが基本にある。どの楽器を担当するかは上手下手で決めているのではないということも演奏前に副園長から保護者にあえて説明があり、大人本位の子どものランク付けを慎んでほしいとの意図の表れと思われた。

楽器は、大太鼓1・小太鼓1・シンバル1、あとはトライアングル・すず・カスタネット・タンバリンというごく普通の簡易リズム打楽器だが、カスタネットをはじめ良い音の出る上質の楽器を使っていたので、耳に心地よい演奏であった。楽器を大切に扱い、トライアングルを首からぶら下げて持てるようにするのは、落とすのを防ぐ配慮であると思われた。子どもたちの演奏は楽器ごとにいくつかのリズムパターンを繰り返し、決して難しいものではないが、合奏に最も必要な「他の楽器の音をよく聴く」ことができていた。保育者の演奏するピアノや、多様な楽器の音色で演奏される電子ピアノから流れる音楽に耳を傾け、他の楽器のリズムを聴きながら自分の楽器に集中することで、子どもたちは各々が生き生きとリズムを打ち、全体としてすばらしい《カルメン組曲》が出来上がった。みんなで作り上げるこの達成感と満足感は非常に大きなものだと思う。この合奏においても、強弱やリズムの指示等は保育者が舞台下から身ぶり手ぶりで行っていた。

3. 自由表現、舞踊劇、オペレッタ

前年9月のスポーツショーの時には、広い園庭の中央で、まわりを囲む観客を意識せずに演じていた子どもが、今度は空間の限られたステージ上で正面の観客に向かって演じるという点で大きな違いがあった。大勢の子どもがのびのびと動き演じることを第一に考え、大道具などの舞台装置は必要最小限度のシンプルなものになっていた。

1) 年少児

2組に分かれて《さむくてもおもちつきたのしいね》と《はらっぱのできごと》という自由表現が演じられた(写真1)。様々な役柄の被り物と衣装を着けた子どもたちが、ナレーションで語られる物語と音楽を背景に、日常の遊びのままに全身で動き、飛んだり跳ねたり転がったりの表現をしていた。主役も作らず、定まった振り付けもあまりなく、とにかく子どもがそれぞれ自由に全身で楽しんでいる様子が、適材適所に付けられたオペラの親しみやすいアリアやピアノ曲、管弦楽曲などの名曲とともに一つのまとまった表現作品として伝わり、見ている側も十分楽しめた。まだ保育者の導きが必要な子どもには、衣装を

着けた保育者が登場して子どもの先頭に立って誘導していた。衣装や小道具は子どもの表現を引き出す上でも、見る側にとっては表現を補ってくれるという点からも大変大きな役割を果たすということであらためて実感した。

2) 年中児

子どもの持ち味に合わせ、舞踊劇組とオペレッタ組に組み分けされていた。

舞踊劇は、日常のごっこ遊びから生まれた世界に自由表現よりもストーリー性を明確にし、定まった振り付けもあり、その動きは自由表現よりももっとダイナミックなものであった。舞踊劇《森のホテルのおきゃくさまは?》でも、登場する多くの動物と天使の楽しい劇に仕上がっていた。歌うことにとらわれなくて、まだ体で表現したい欲求の方が強い子どもにとって、この歌の無い舞踊劇という段階の果たす役割は大きいと思われる。

一方、オペレッタ《アジツケパンとクリームパンの冒険》^{注6)}を演じる年中児にとっては、今回が初めての歌い踊りながら表現するオペレッタである。昨秋のスポーツショーでは舞踊劇を演じた子どもたちが、今や堂々とはじけるような元気さで8分程のオペレッタを歌い踊り演じきった。(写真2)。年中児とは思えないこの体力は、日々の遊びによって培われたものであろう。最後に全員が登場して踊る形態は、バレエのフィナーレの場面を想わせた。

3) 年長児

3年間の園生活の総まとめの発表として、オペレッタ《新・麒麟の見た夢》^{注7)}が上演された。動きの振幅特に上下動の大きさから成るダイナミックな動き、そろった振り付け、歌唱の美しさ、客席に向かっての表現など、昨秋のスポーツショーで見たオペレッタよりも、もう一段ステップアップしていて、半年間の成長が随所に見られる15分程のオペレッタであった(写真3)。麒麟と雲が背比べをするシーンでは、雲がもくもく湧いてくる大道具の工夫も素晴らしかった。舞台袖ですばらしいピアノ演奏で舞台をもちあげる保育者、舞台の下から子どもたちに身ぶり手ぶりで的確に指示を出す保育者等の子どもと一体になった姿にも心打たれた。最後に、ウサギ・麒麟・雨のこども・もくもく雲全員が登場して踊り歌うバレエのフィナーレを想わせるシーンで賑やかに終わった。カーテンコールでは、子どもたちが一つ一つの役柄の順番に幕の前で一礼し、再度幕が上がると全員が整列して一礼する等、劇場での舞台マナーが本格的に体験できる場にもなっていた。

自由表現、舞踊劇、オペレッタすべてが今回も主役を作らず全員で演じていた。今日経



写真1 自由表現
《さむくてもおもちつき楽しいね》



写真2 オペレッタ
《アジツケパンとクリームパンの冒険》

験した、みんなで1つの作品を作り上げる達成感や満足感や演じる喜びは、子どもたちの心の中に将来にわたりずっと残っていくと思われるほどの大きなものであったように思う。

文化祭を終えた後に、ある保護者の方から子どもが直前に熱を出して数日園を休んだが、当日は何の問題



写真3 オペレッタ《新・キリンの見た夢》

もなく文化祭に出演することができたという話をうかがった。この文化祭も日常の園生活の延長上にあり、この日のために特別に猛練習をするという類のものではなかった。これも日常の保育の積み重ねの大切さを物語るものである。

Ⅲ「こどもの日のパーティー（園庭発表会）」を見学して

2017年5月に新年度になって初めての園庭発表会「こどもの日のパーティー」を見学した。2月の発表会から2か月余り。上の組に上がった子どもたちと4月に入園したばかりの子どもたちの園生活を見ることができる良い機会となった。昨年のスポーツショウと同様に、通常の園では運動会が行われる園庭の中央が舞台となり、周りを保護者席と子どもの席が囲み、斉唱、歌と表現、初めての表現活動、自由表現、舞踊劇、フォークダンスでプログラムが構成されていた。子どもたちの手作りのこいのぼりが風にはためく中、《こいのぼり》と《おはながわらった》^{注8)}が全員で歌われた。

1. 斉唱

- 1) 年中児 《ひらひらちょうちょう》^{注9)}
- 2) 年長児 《はるかぜそよそよやってきた》^{注10)}

2曲とも、季節、歌詞の内容、シンプルなメロディー、曲の長さもすべてが子どもにぴったりでよく考えられた選曲だった。年中児は、入園して1年が過ぎたところだが、ちょうちょうの羽を背中に着けて気分もなりきって、きれいな声で音程も正確に歌っていた。年長児は、日々の遊びの中で肺活量も増え声量もより大きく歌詞も丁寧にはっきり歌うことができるまでに成長していた。

2. 歌と表現

- 1) 年中児 《うさぎさんがきてね》^{注11)}
- 2) 年長児 《やぎさんとかけっこ》^{注12)}

年中児は園庭の中央でうさぎになって跳ねながら歌に合わせて踊り（写真4）、年長児は山羊の被り物をかぶった子どもたちが、同じく被り物をかぶった保育者を先頭に、歌に

合わせて山羊のまねをして園庭のトラックを走りながら飛んだり跳ねたりの表現活動を行った（写真5）。日々の園生活で歌と表現活動が一体となっている子どもたちは、いつも通りに自然体で楽しそうに演じていた。年長児では、2組に分かれて交互に歌い動き、ダイナミックな表現をしていた。ほんの3か月前の文化祭での年中児からの成長を感じた。



写真4 《うさぎさんがきてね》



写真5 《やぎさんとかけっこ》

3. 初めての表現活動・自由表現・舞踊劇

ゆかり文化幼稚園の特色といえるこれらの演目が、年度初めには、どのような形で行われるのか、昨年度は見るができなかったので大変興味深く見学した。

1) 年少児

4月に入園したばかりの年少児は、一人ずつ色とりどりの風船を持ち、《ふうせん》^{注13)}の歌に合わせて保育者が先頭で走り出すと、子どもは後を追って走り出した（写真6）。曲が《キラキラ星変奏曲》に変わると、音楽に後押しされるように子どもたちはより元気よく自由に園庭を何周も走りまわった。子どもたちの持つ色とりどりの風船が鮮やかに揺れてパッと花が開いたようだった。ゆかり文化幼稚園では、この様子を子どもたちの初めての表現活動ととらえ、風船は表現活動を引き出す大切な道具ととらえているということが、以下の副園長のお話から分かった。これは終了後に直接伺った話である。

「今年の大人数の子どもをどうしたら一斉に動かすことができるのか頭を悩まし、風船を持たせてみた。風船は本当に魔法のような力を持っていて、風船を持った途端に子どもの表情が生き生きとして一斉に走り出した。子どもが手を放しても風船が舞い上がってしまわないように、中にはヘリウムではなく水素ガスを詰めた。」

表現活動に子どもたちを導くために、保育者がいかにこどもをよく見て理解し、知恵と工夫を凝らしているのかを垣間見た。



写真6 初めての表現活動

2) 年中児（自由表現）

クモの巣に捕まった虫を鳥や動物が助けるという子どもの日常のごっこ遊びに、ナレーションと曲をつけた短い作品であるが、被り物や羽をつけた子どもたちは保育者の後についてあちこち元気よくとびはね動きまわり、表現することを心から楽しんでいる様子だった（写真7）。広い園庭で演じたこの体験から9月のスポーツショーでは舞踊劇が演じられるまでに伸びていくのである。

3) 年長児（舞踊劇）

こいのぼりを題材にした舞踊劇で、子どもたちが、こいのぼり、春風、ヤギなどの動物、花の被り物をつけて次々に登場し（写真8）、ナレーションと音楽に合わせて元気に表現し、最後は全員の踊りで終わった。体の動きも年中児よりもはるかに大きく、中には何度も側転をするほど運動能力の高い子どもたちもいて、広い園庭を駆け回る運動量は運動会のかげっこに匹敵するほど多く、日々の積み重ねのすごさを今回も感じた。これから子どもたちは、日々の遊びの中での表現する楽しさを、スポーツショーや文化祭を通してオペレッタの活動に展開していくのである。



写真7 自由表現



写真8 舞踊劇

4. フォークダンス

園のもう一つの特徴として、外国のフォークダンスを子どもの活動に取り入れていることがあげられる。今回のフォークダンスも年齢の上と下の子どもが手をつないでいっしょに踊れる、ゆったりしたテンポ、美しいメロディー、やさしいリズムとシンプルな動きを伴うものであった。フォークダンスは音楽の色々なリズム、たとえばポルカ、ワルツ、mazurka等を体で覚え楽しむことができるメリットがあると思う。

IV おわりに

2016年5月にゆかり文化幼稚園へ初訪問してから2017年5月まで1年間にわたり、園生活、園庭発表会、スポーツショー、造形展、文化祭と見学させていただき、いろいろな表

現活動の場面を見てきた。特に、2017年2月の文化祭では園における表現教育の総まとめ、5月の園庭発表会では、園における表現教育の出発点を続けて見ることができた。

ゆかり文化幼稚園の表現教育には以下のような特徴があると考えられる。

1. 徒歩通園を原則とし、園内の起伏の多い環境で走り回る日々の運動量が大変多いため、表現するための柔軟で丈夫な体とそれを支える足腰、歌うための肺活量や腹筋、背筋が自然に鍛えられている。
2. きれいな声で丁寧な歌うような指導がされ、頭声発声の体験により音域も広がり歌える歌や表現の幅も広がる。また、簡易な交互唱から始め、徐々に声を合わせハーモニーを作り上げる楽しさへ導く、段階を踏んだ指導がされている。
3. 楽器はリズム楽器に限ることで、合奏に大切なメロディーを聴きながらリズムを正確に打つことができるようになり、聴く力とリズム感が育っていく。
4. 園で歌われる曲は、弘田龍太郎、中田喜直、大中恩、湯山昭をはじめ、子どもの歌の代表的な作曲家の作品や、わらべ歌、外国の歌等、子どもの年齢に合う想像力を喚起し夢のある歌詞のものが選ばれている。また、自由表現や舞踊劇、造形展、園内放送等、様々な場面でクラシックの小品、ポップスや吹奏楽の名曲等、芸術性の高い音楽が使われ、子どもが日常の園生活で刺激の強すぎない美しい音楽に触れるように配慮されている。
5. 登園時に、園に用意されている様々な動物・虫・花等の被り物をかぶり、そのものになって遊ぶことが日常化されていて、演じるという表現活動に自然につながっていく。踊るのに適した多数の子どもの歌が用意され、園生活の中で音楽に合わせて歌いながら表現することが自然に身に付く。また、表現活動を子どもの成長に合わせて、初めての表現活動→自由表現→舞踊劇→オペレッタと段階を踏んで指導していくことにより、最終段階として子どもが無理なく心から楽しんでオペレッタを演じられるようになる。
6. 園生活の様々な表現活動の中で、常に音楽、身体、造形の3つ表現の融合が図られていて、子どもたちにも自然に身につけていく。

これらの特徴を生かした表現教育は、他園での表現教育、はたまた幼児期の表現教育を考える上での道標になるのではないかと考えた。また、今回の訪問においても、保育者の表現力の高さには改めて感心した。表現の専門教育を受けた保育者ばかりではなく、保育者になってからの研修と日々の保育者の努力によって身につけたものと推察される。ゆかり文化幼稚園の保育者には、子どもたちの表現を大切に思う気持ちとそれを大切に育てていこうとする心意気を感じられた。表現教育には、保育者自身の表現力と指導計画を作る上での発想の柔軟性と想像力が不可欠であるということも、今回も強く感じた。

謝辞

本稿の作成にあたり、ゆかり文化幼稚園には数回にわたり園の行事を見学させていただき、貴重なお話を伺うことができ、また、写真の掲載も許可していただくことができました。

た。ここに深甚なる謝意を表します。

注

- 1) 秋山真理子 (2017) 幼児期における表現教育—ゆかり文化幼稚園を訪問して 就実教育実践研究第10巻 pp. 153-164
- 2) 《かえるのうた》関根栄一作詞／團伊玖磨作曲
- 3) 《ダチョウにのって》古茂田信男作詞／湯山昭作曲
- 4) 《きんもくせい》佐藤雅子作詞／湯山昭作曲
- 5) 《わが名はカウボーイ》阪田寛夫訳詞／マグギラール作曲
- 6) オペレッタ《アジツケパンとクリームパンの冒険》藤田妙子作詞／作曲
- 7) オペレッタ《新・キリンの見た夢》藤田妙子作詞／作曲 須藤恵美補作
- 8) 《おはながわらった》ほとみこうご作詞／湯山昭作曲
- 9) 《ひらひらちょうちょう》小林純一作詞／中田喜直作曲
- 10) 《はるかぜそよそよやってきた》北原節子作詞／磯部倅作曲
- 11) 《うさぎさんがきてね》まどみちお作詞／冨田勲作曲
- 12) 《やぎさんとかけっこ》吉岡治作詞／小林亜星作曲
- 13) 《ふうせん》小池タミ子作詞／中田喜直作曲

参考文献

- 秋山真理子 (2017) 幼児期における表現教育—ゆかり文化幼稚園を訪問して 就実教育実践研究第10巻 pp. 153-164
- 大地宏子 (2012) 童謡作家、弘田龍太郎の幼児教育 鶴見大学紀要第49巻 pp. 9-16
- 印牧季雄 編 (弘田龍太郎 作曲) (1928) 童謡遊戯 落葉の踊り 京文社
- 上笙一郎編 (2005) 日本童謡事典 東京堂出版
- 久保富次郎著 (1929) 唱歌遊戯と新舞踊 教文書院
- 小島美子 (2004) 日本童謡音楽史 第一書房
- 畑中圭一 (2007) 日本の童謡 誕生から九〇年の歩み 平凡社
- 弘田龍太郎著 (1936) 作曲の初歩 岩本書店
- 藤田圭雄 (1977) 解題戦後日本童謡年表 東京書籍
- 読売新聞文化部編 (1999) 唱歌・童謡ものがたり 岩波書店
- 全国大学音楽教育学会編著 (2013) 日本の子どもの歌 唱歌童謡140年の歩み 音楽之友社
- 高橋大海・博子編 (1991) 楽譜 子どもの歌260選 相川書房
- 日本童謡協会編 (1985) 楽譜 日本の童謡200選 音楽之友社
- 藤田圭雄・阪田寛夫・中田喜直・湯山昭監修 (1997) 楽譜 日本童謡唱歌大系 東京書籍
- 森澤郁夫監修 (2009) 楽譜 子どものための歌—弘田龍太郎作品集 創風社
- ゆかり文化幼稚園 編／須藤恵美 選 楽譜 踊れるこどもの歌 I II III ゆかり文化幼稚園